

## 遅刻する生徒の行動について

成田 修治\*

### I はじめに

毎日の学校生活で、「遅刻」という現象についてはよく話題になり、その対策などについてはよく検討されるけれども、生徒を理解するにあたって、遅刻ということについて考察されることは少ないようである。生徒の性格や行動の一面を示すものとして、遅刻ということももっととりあげられてよいと考えられる。

ここでの目的としては、遅刻する生徒の実態と行動評価の関係、特に遅刻の多い生徒の事例について考察しようとするものである。

### II 方法

#### 1 対象

豊栄市内中学校3年生 男48名,女54名 計102名

#### 2 資料

- |              |                |
|--------------|----------------|
| (1) 生活委員会ノート | (3) 知能検査       |
| (2) 学級日誌     | (4) 行動および性格の記録 |

#### 3 事例研究

遅刻の多い生徒3名について考察

### III 結果とその考察

#### 1 調査結果について

(表1) 遅刻回数と人数

(遅刻回数は1年間の集計による、数字は実数)

性\回	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	18	23	24	計
男	11	2	4	2	1	2	4	1	4	1	1	3	2	1	4	2	1	1	1	48
女	39	6	2	3	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	54
計	50	8	6	5	1	2	6	3	4	1	1	3	2	1	4	2	1	1	1	102

\* 豊栄市立岡方中学校

(表2) 遅刻回数と知能偏差値平均

性\回	0	1~3	4~6	7~9	10~12	13~15	18~24	平均
男	49.3	56.1	59.5	48.9	57.6	53.1	48.6	54.6
女	47.2	51.3	52.0	47.5	-	-	-	51.5
平均	47.7	53.2	57.8	49.7	57.6	53.1	48.6	53.8

(表3) 遅刻回数と学業成績5段階評価 (数字は平均点)

性\回	0	1~3	4~6	7~9	10~12	13~15	18~24
男	2.3	3.6	2.3	3.0	3.3	3.0	2.3
女	3.1	2.8	2.5	2.0	-	-	-
平均	2.9	3.2	2.4	2.5	3.3	3.0	2.3

(表4) 遅刻11回以上の生徒の「行動および性格の記録」の評価 (数字は人数)

回	項目 人評 定	基本的な生活習慣		自主性		責任感		根気強さ		創意くふう		情緒の安定		寛容		指導性		協力性		公正さ		公共心	
		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
		11	3	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	2	1	2	1	1	2	3		3	
12	2	1	1		2	1	1		2	1	1	1	1	1	1		2		2		2		2
13	1	1		1		1	1			1	1			1			1	1			1		1
14	4	1	3	1	3		4	1	3	1	3	1	3	2	2	1	3		4		4		4
15	2	1	1		2	1	1	1	1		2	1	1	1	1		2		2		2		2
18	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1
23	1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1		1
24	1		1		1		1		1	1			1		1		1		1		1		1

(表5) 学級別にみたA評定(行動および性格の記録) (数字は実数)

性\学級	あ	い	う	計
男	45	33	17	95
女	47	64	22	133
計	92	97	39	228

(表6) 遅刻回数と基本的生活習慣の評価

(数字は人数)

回 性 評定	0		1~3		4~6		7~9		10~12		13~15		18~24		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
A	0	11	2	3	1	0	1	1	3	0	3	0	0	0	10	15
B	11	28	6	8	6	2	5	1	3	0	4	0	3	0	38	39
計	11	39	8	11	7	2	6	2	6	0	7	0	3	0	48	54

## 2 調査結果についての考察

表1に示したように遅刻回数の最大は、3年男子で年間を通じて24回であった。女子の最大は7回である。日常の学校生活では多いのか少ないのか、他校の事情はわからないので、なんともいえないが遅刻を全くしなかった生徒は、全体で50名。50%。

なお、遅刻をしない生徒を調べてみると、学業・行動とも安定しているか、学習成績はふるわないが気だてのよい生徒で、行動上の問題が、ほとんどない生徒である。家庭的にも安定しており、家庭内に波かぜがなく、夫婦円満、若夫婦と、としより夫婦との間もうまくいっているようすである。

(2) 表2は、遅刻者の知能について示したものである。入学後実施(45・5・8)した新制田中B式知能検査による知能偏差値の平均と遅刻回数との関係を示したものである。遅刻回数と知能との間に特異な関係が認められる。すなわち、遅刻を全くしなかった生徒の平均が低く、1回から6回、10回から15回までの遅刻者の平均がよいことである。

(3) 表3は、遅刻者の成績についてまとめたもので、遅刻回数と5段階評定の関係を見ると、9教科の評定の間にも特異な関係が認められる。すなわち、遅刻を全くしなかった男子の平均が低いことである。これに対して、遅刻10回から15回までの生徒の5段階評定平均はよいのである。

なお、18回から24回までの遅刻者の学習成績は低い。

(4) 次に、11回以上遅刻した者を、遅刻回数の多い生徒とわくをきめて、指導要録「行動および性格の記録」の項目の評定との関係についてみたのが、表4である。なお、女子は最大が7回だったので略した。

行動記録は11項目のうち、遅刻回数と評定段階との間にどのような関係があるだろうか。表4からは、有意の関係があるとは思われない。「行動および性格の記録」をとり上げたのは、生徒の行動性格面をどのようにみているか、生徒をどのように理解しているかということと深い関係があると思ったからでもある。遅刻回数の多い生徒3名は、B評定である。

(5) 表5は、学級別にA評定とC評定を与えた数をみたものである。3クラスの評定にかなりの差異がみられるようである。評定のしかたについて述べるつもりはないが、あ組、い組に対して、う組の与えたA評定の数は、極端に少ない。むしろ、う組に比べて、あ組、い組が多いと言わなければならない。い組について見ると、女子に与えたA評定が、他の2クラスに比べて多い。

更に「基本的な生活習慣」だけについてみると表6になる。

(6) 表6をみると、遅刻回数10回から15回までの生徒の中で、「A」評定を受けた者が6名いる。この評定は、遅刻そのものと有意の関係はなかったわけである。むしろ、他の面で有意の関係があったのであろう。「基本的な生活習慣」の趣旨は、遅刻をするな、時間を守れ、とだけは言っていないのだから。日常の学校生活においては、さまざまな生活習慣が問題にされるのだから。

### 3 事例の概要

#### (1) 事例1 (生徒A)

##### (ア) 家庭環境

父・高小卒、運送会社運転手。母・高小卒、家事、農業。姉・高卒、他県に在任。

父はAに対して厳格、教育についての見識をもっているが、やや口数が多い。Aは父に信用があり、与えられた仕事は成しとげる。家では口数が少なく、母とは用件以外口をきかない。

##### (イ) 生活態度、性格など

姉弟ふたりで長男のせいか、ゆったりしているが、上目づかいに人を見るような感じがある。発音が甘ったるく、語尾がはっきりしない。語りが豊富で、よく級友を煙にまく。服装はだらしがなく、不必要な飾りを身につけたがる。

交友は狭く、生活態度にまじめさを欠き、級友との間にボスの存在である。

##### (ウ) 学校生活

こわくない教師には反抗的態度をとることがときどきあり、反面なれなれしい態度を示すことがある。学習にはむらが多く、教室でも気の向かないときは机に顔をふせている。学習の邪魔になることはない。学習用具は乱雑で忘れ物も多い。

身体が大柄なので力仕事は気が向けばやる。全般に消極的で規則を守らないことがある。運動は普通。

#### (2) 事例2 (生徒B)

##### (ア) 家庭環境

父母共に高小卒、同じ職場で働いている。姉2人は中卒で会社勤務、両親は子供に対しては放任主義で、教育にも関心が薄く、社会的常識に欠け、能力的に低いと思われる。家の中は整理されていない。

Bと両親との会話はほとんどなく、Bは家にいるときは部屋にとじこもり、好きな機械いじりをやっている。

##### (イ) 生活態度、性格など

言葉使いに特徴があり、同じ言葉を何回もくりかえす。言葉に生気がなく、使い方を知らないと思われることがある。表情も弱々しい感じである。

理屈の通らない意地をはるかと思うと、妙におどおどするときがある。態度が拒否的である。

##### (ウ) 学校生活

知的能力が低く、授業中は孤立している。学用品などもそろっていない。グループ活動には意見を出す、的が外れていることが多く、取り上げられることはめったにない。作業には協力的であり、進ん

で働く。

小柄で部活動にも参加しない。弁当を持ってこないことが多い。友人は成績上位の生徒に1名いるだけであるが、根が悪くないので級友からきられることはない。

### (3) 事例3 (生徒C)

#### (ア) 家庭環境

父母共に農業に従事している。長姉は高卒で勤めにでており、次姉は高3在学中である。両親は温厚で教育熱心である。

Cは末子の長男なのでわがままに育つ。両親の言葉に真剣に耳を傾けることがなく、自分にとって不利益なことに話が及ぶと、すぐに顔をそむけてふくれる。次姉は勉強のことをやかましくいうのでむたがっており、両親もCに対しては半ばあきらめかけているようすもみられる。

#### (イ) 生活態度、性格など

投げやりで荒っぽい言葉を使う。他人の話を最後まで聞こうとせず、「わかった。わかった。」といって逃げてしまう。卑わいな言葉を使用して、ひとり悦に入っている。

わがままに育っているので、全体的に明るい感じがあるが、目の動きに落ち着きがない。自分の気に入らないことにはだれに対しても反抗的である。物事に対してむら気でねばりを欠き、時には衝動的に大声を出したりする。信頼のできる友人はいない。級友のうしろからくっついていく感じである。

#### (ウ) 学校生活

知的能力が低く、判断力に欠けている。学習には大変むらがある。学習中は私語が目立ち、落ち着きがない。係り活動などは非協力的であり、女子から用事を頼まれるとニヤニヤしながらも引き受けたりする。調子のよいときは気のむいた仕事であればやるが、級友から苦情がでることがある。

身だしなみはきちんとしているがやや神経質である。周囲からおだてられると喜んでいるお人好しの面がある。作業は消極的で、おしゃべりはつきることがない。

## 4 遅刻についての問題点

### (1) 一般的な問題傾向

㉑ 上級学年ほど遅刻が多い。㉒ 時期的には、2学期から増加し、冬期にかけて最高となる。㉓ 遅刻に対して罪悪感がうすく、その場のがれの理由が多い。㉔ 両親がマイクロバスなどを利用して、子どもより先きに家をでるため、子どもの監督がゆきとどかない。㉕ 遠距離でない生徒が案外遅刻をする。

### (2) 遅刻を常習とする生徒の問題傾向

#### ア 生活・行動面

㉖ 家庭ではわがままに親も半ばあきらめている。㉗ 親子の対話が不足しており、親側にも問題がある。㉘ 集団生活の規則をおかし、他人に迷惑をかけても平気である。㉙ 生活行動に節度を欠き、集中力がなく、全体的にだらしく無責任である。㉚ 学習意欲に乏しく、成績下位か、またはもてる能力を十分発揮していない。㉛ グループ活動、共同作業などは消極的である。㉜ 遅刻をしない、とい

う努力が足りない。

#### イ 人柄・性格面

㉑ 小心者で、臆病で、その上、はにかみ、てれやである。㉒ おしゃべりであるか、口数が少ないかのどちらかである。㉓ 変り者で周囲との接触がうまくいっていない。㉔ ある面ではお人好しで従順だが、意地張っりである。㉕ 興奮するときがある。

#### (3) 遅刻を常習とする生徒の指導

㉖ 遅刻の原因、実態を理解した指導が必要である。㉗ 家庭との協力が必要である。㉘ 遅刻防止に対するはっきりした学校の姿勢が必要である。㉙ 学級を核として、生徒同志の連帯感、自覚を促す話し合いが必要である。㉚ 学年会などで取り上げ、教育的な態度で個人理解に努めなければならない。

#### IV おわりに

遅刻の問題は、遅刻だけを取り上げて防止対策を講じても効果はうすいようである。特に遅刻常習の生徒であれば、ただ単に、遅刻をするたびにしかってみても、馬の耳に念仏である。遅刻する生徒の実態を十分には握し得ない、その場かぎりの指導あるいは形式的な規制をやるだけでは効果的な指導とはいえないのである。

遅刻をするということだけでその生徒を問題生徒として考えることはできないと思われるが、いつも遅刻をする生徒については、広く他の行動との関連を考えてみる必要がある。

ここにとりあげた遅刻の問題は、その回数の多いものについて他の学習、行動との関係を概観したのであるが遅刻をなくすることをひとつの目的としての生徒に対する具体的な指導がこれから考えられなければならない。